

第17回

渋谷の 午後のコンサート。



2023.5.7(日) 14:00開演 Bunkamura オーチャードホール

Sun. May 7, 2023, 14:00 at Bunkamura Orchard Hall

〈マエストロ・ズーカーマン!〉 (Maestro Zukerman!)

指揮とヴィオラとお話 ピンカス・ズーカーマン

Pinchas Zukerman, conductor, viola & speaker

ヴァイオリン 三浦文彰* Fumiaki Miura, violin

コンサートマスター 三浦章宏 Akihiro Miura, concertmaster

モーツァルト：歌劇『魔笛』序曲(約7分)

Mozart: Overture from opera "The Magic Flute" (ca. 7 min)

モーツァルト：ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲* (約30分)

Mozart: Sinfonia Concertante for Violin, Viola and Orchestra (ca. 30 min)

— 休憩 intermission —

ベートーヴェン：交響曲第7番(約40分)

Beethoven: Symphony No. 7 (ca. 40 min)

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団／協力：Bunkamura
Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra / In Association with Bunkamura

◎すべてのお客様に、快適にお楽しみいただくために / Dear audience

♪本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。♪演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフがご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。♪曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。♪演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。♪演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

♪ All seats are reserved. Late admittance will be refused during the live performance. If you enter or reenter just before the concert or between movements, we may escort you to a seat different from the one to which you were originally assigned. ♪ Exiting during the performance will be tolerated. If you do not feel well, please exit or enter as you need. However, please mind the other listeners so that they will be minimally disturbed. ♪ Please refrain from using your cellphone or other electronic devices during performance. ♪ Hold applause please. Please cherish the "afterglow" at the end of each piece for a moment before your applause.

5/7

渋谷の
午後のコンサート

出演者プロフィール

指揮とヴィオラとお話

ピンカス・ズーカーマン

Pinchas Zukerman, conductor, viola & speaker

ピンカス・ズーカーマンは、50年の長きにわたりヴァイオリン奏者、ヴィオラ奏者、指揮者、そして室内楽奏者として世界の音楽界で不動の地位を築いている。その優れた技巧、豊かな表現、美しい音色、そして完璧なまでの音楽性は、グラミー賞ノミネート作を含む100枚を超える録音にも聴く事が出来る。近年のハイライトとしてバレンボイムとのベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ全曲演奏会、メータとの共演によるベルリン・フィルおよびロサンジェルス・フィルへの客演等が挙げられる。後進の指導にも熱心に携わり、ズーカーマンから靈感を受けた多くの音楽家が現在演奏活動や教育活動、そして音楽祭等で中心的な役割を果たすなど各方面で活躍している。



©Cheryl Mazak

ヴァイオリン 三浦文彰

Fumiaki Miura, violin

ハノーファー国際コンクールにおいて、史上最年少の16歳で優勝。ロサンゼルス・フィル、ロイヤル・フィル、マリンスキー劇場管、ベルリン・ドイツ響などと共演。共演指揮者にドゥダメル、ゲルギエフ、フェドセーエフ、ズーカーマンなど。2018年サントリーホールARKクラシックスのアーティストティック・リーダーに就任。ロンドンの名門ロイヤル・フィルのアーティスト・イン・レジデンスも務める。最近はピリスとのデュオ、パリにおけるリサイタルを行い、ロイヤル・フィル、ウィーン室内管との弾き振り、バルセロナ響、ビルバオ響などと共演。CDはエイベックスよりリリース。22年には「Forbes」Asiaにおいて「世界を変える30歳未満の30人」に選出。使用楽器は、宗次コレクションより貸与されたストラディヴァリウス1704年製「Viotti」。



©Yuji Hori

プログラム・ノート

解説=飯尾洋一

マエストロ ズーカーマンの颯爽とした指揮とともに

本日指揮を務めるマエストロはピンカス・ズーカーマン。若くしてヴァイオリン奏者として名声を高め、同時にヴィオラ奏者としても活躍しています。また、指揮活動にも積極的で、セントポール室内管弦楽団やオタワ・ナショナル・アーツ・センター・オーケストラで音楽監督を務めました。

ズーカーマンのようにヴァイオリンとヴィオラの二刀流をこなす奏者は少なくありません。モーツァルトもヴァイオリンとヴィオラをどちらも巧みに弾いたといえます。もっとも、モーツァルトがいちばん得意としていたのはピアノですから、三刀流(?)と呼ぶべきでしょうか。モーツァルトは故郷ザルツブルクの楽団でヴァイオリニストを務め、ヴァイオリン協奏曲のソロを弾くこともありました。その後、ウィーンに移り住んでからは、ピアニストとして名声を高めています。

ちなみにベートーヴェンにもヴィオラ奏者の経験があります。ベートーヴェンも本領はピアノでしたが、ボン時代の若き日には宮廷楽団のヴィオラ奏者を務めていました。意外とヴィオラは大作曲家に人気なのかも？



巨匠と俊英による豪華共演をお楽しみください

提供=宮崎国際音楽祭 ©K. Miura

5/7

渋谷の
午後のコンサート

厳かなファンファーレから軽快なメロディへ

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (1756-1791)



はわずか35歳で世を去っています。生涯を閉じる1791

年、天才の創作意欲は爆発的に高まり、次々と傑作を世に送り出しました。歌劇『魔笛』もそのひとつ。劇団座長のエマヌエル・シカネーダーの提案により作曲され、モーツァルト自身の指揮による初演は好評を博し、初演から1か月あまりで20回以上も上演されるほどのヒット作となりました。

物語を一言で説明するなら、「メルヘン世界を舞台にしたボーイ・ミーツ・ガール」。王子がプリンセスを救出し、魔法の笛の力を借りて試練を乗り越えるといった筋立ては、まるでロール・プレイング・ゲームに出てきそう。ただし、物語の背景にはモーツァルト自身も会員であった秘密結社フリーメイソンの思想が色濃く反映されており、同胞愛などの教義がテーマに織りこまれているといえます。

序曲は荘重な序奏で開始され、これに軽快でややコミカルな主題が続きます。厳かな儀式風のファンファーレをはさんだ後、陽気な気分で曲を閉じます。



ババゲーノを演じる劇団座長のエマヌエル・シカネーダー

ソロの妙技と雄大なオーケストラ・サウンドの融合

「協奏交響曲」という言葉には、あまり耳なじみがないかもしれません。協奏曲と交響曲が合体したような言葉ですが、ここでは複数のソリストがいる協奏曲を指すと考えればよいでしょう。作曲は1779年。その直前にモーツァルトは旅先のパリで、協奏交響曲が大流行している様子を目にします。そこで、故郷ザルツブルクに帰った際、この流行のスタイルを紹介しようと考えて、「ヴァイオリ

「ソリストとヴィオラのための協奏交響曲」を作曲しました。

ソリストはヴァイオリンとヴィオラのふたり。通常であれば、高音楽器であるヴァイオリンが主、中音域を担うヴィオラは従となりそうなもの。でも、この曲ではそうはなりません。ふたりが対等な関係で名人芸を競い合うのです。

実はこの曲は普通とは少し違った方法で楽譜が書かれています。楽譜上ではほかの楽器はみんな変ホ長調で書かれているのに、独奏ヴィオラだけは半音低いニ長調で書かれています。そのまま弾いてしまうと不協和音だらけになってしまいますが、ヴィオラは通常より半音高く調弦して演奏するように指定されています。ニ音の半音上は変ホ音。つまり、実質的にほかの楽器と同じキーになって調和します。なぜわざわざそんなややこしいことを？ おそらく、弦の張力を上げてヴィオラからより明るく輝かしい音を引き出すためなのでしょう。ということは、ヴィオラを弾いたのはモーツァルト本人だったのではないかと推察できるのですが、初演についての資料は残っていません。

ふたりのソリストの妙技に加えて、雄大でシンフォニックなオーケストラ・パー



ザルツブルクにあるモーツァルトの生家。現在は博物館として、世界的に知られる観光スポットとなっている

©Posztós János - stock.adobe.com

トも聴きどころ。ウィーンへと渡る前のザルツブルク時代に書かれた作品ですが、これほど充実した作品は、天才モーツァルトといえどもそうそう書けるものではありません。奇跡のような傑作です。

第1楽章 アレグロ・マエストーソ わくわくするような期待感にあふれたオーケストラに続いて、ふたりのソリストが登場し、親密な音の対話をくりひろげます。

第2楽章 アンダンテ 前楽章から一転して沈痛なムードが支配します。陰影豊かな絶美の音楽。

第3楽章 プレスト はしゃぎまわるような活発なフィナーレ。まるで陽気なおしゃべりのよう。

躍動するリズムを駆使したベートーヴェンの人気作

年末恒例の「第九」を別格とすれば、**ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン** (1770-1827) の交響曲で現在もっとも演奏機会の多いのはこの曲でしょう。「英雄」「運命」「田園」といった愛称付きの交響曲を越える人気を誇っています。これだけの人気作なので、**交響曲第7番**にもなにか愛称があつたらいいのに……と思わなくもありません。もしあえて付けるとしたら？ 曲想からいえば「熱狂」、作風からいえば「リズム」あるいは「ダンス」でしょうか。かつて、ワーグナーはこの作品を「ダンスの神格化」と称えました。ダンスという人間の根源的な喜びが、最高度の芸術へと高められているということなのでしょう。特徴的なリズムを巧みに駆使して作品を築き上げる様は、まさに神の領域です。



作曲は1811年秋から12年春にかけて。初演は作曲者の指揮により1813年12月にウィーンにて行われました。演奏会の主な目的は傷病兵救済のためのチャリティ。当時、ヨーロッパで猛威をふるっていたナポレオン軍との戦いで傷ついた兵士たちを援助しようという名目で演奏会が開かれたのです。この演奏会では、同時にベートーヴェンの「ウェリントンの勝利」(通称「戦争交響曲」)も初演されました。この曲は現在ではほとんど演奏されませんが、ナポレオ

ンが大敗した「ビトリアの戦い」を題材としており、当時のウィーンの人々に大いに歓迎された時事的な作品です。交響曲第7番と「ウェリントンの勝利」は聴衆を熱狂させ、愛国的な雰囲気の中で大成功を収めました。

第1楽章 ポコ・ソステヌートーヴィヴァーチェ 堂々たる大規模な序奏で開始され、軽快な付点リズムの反復が躍動感あふれる主部を導きます。

第2楽章 アレグレット 痛切なメロディが粛々と奏でられ、次第に大きく高潮します。別名「不滅のアレグレット」。初演時にはアンコールを求められるほどの好評を呼びました。

第3楽章 プレスト：アッサイ・メノ・プレスト 鋭く弾むようなリズムで開始されます。飛び跳ねるようなスケルツォと、ひなびた田園風のトリオが交互にあらわれます。

第4楽章 アレグロ・コン・ブリオ 叩きつけるような激しいリズムを執拗にくりかえしながら、陶酔的な興奮と熱狂を呼び起こします。



ウィーン郊外のバーデンにあるベートーヴェン・ハウス・ミュージアム。バーデンは温泉地として知られ、ベートーヴェンもたびたび保養に訪れた
©sunday_morning - stock.adobe.com

いとお・よういち(音楽ジャーナリスト)／著書に『クラシック音楽のトリセツ』(SB新書)、『R40のクラシック』(廣済堂新書)、『マンガで教養 はじめてのクラシック』監修(朝日新聞出版)、『クラシックBOOK』(三笠書房)他。雑誌やウェブ、コンサート・プログラム等に幅広く執筆する。テレビ朝日「題名のない音楽会」他、放送でも活動。